

「火」をめぐる神話と祭り

火は文化の創造の基礎

火は人間にとって欠くことのできないものであつて、人間の文化の発達には、火を人間が管理することができるようになつたことに依つていふといつても過言ではない。火が作り出す熱と光が今日の文明をもたらしたのである。人は火によって、闇を追い払い、寒冷地への進出を果たし、害獣を追い払い、調理した食物を作り出し、自然を開発（ある意味では破壊）して人間の側に取り込み、その周囲に人を集めて仲間を作り、その結果としてのさまざまな文化物を作り出してきた。このことは、もし現代人が火を管理する能力を失つた状態を想定すればすぐにわかる。地球上のほとんどの人々がたどころに死滅し、生き残つた者もその行動を大幅に縮小せざるをえなくなつてしまふからである。火は人間の生命を根本的なこと

小松 和彦

Written by
Kazuhiko Komatsu

ろから支えるものなのであり、文化の創造の基礎なのである。

火は、暖を取る、灯りとする、害獣を追い払う、といった実用的な側面だけではなく、そうした側面を背景にして、象徴的あるいは宗教的な意味や役割も担ってきた。それは火をめぐる想像力の産物としての文化といつてもいいかもしれない。わたしがここで考えてみたいのは、こうした火をめぐる信仰の「語り」と「実践」である。

火をコントロールできるのは、人間だけであ

る。人間だけが火を作り出すことができる。しかし、最初の火は人間が作り出したものではない。それは人間が生まれる以前から、生物がこの地球上に誕生する以前から存在していた。自然のなかに存在する火を生活のなかに持ち込んで、暖を取ったり、灯りにしたり、食物の調理に利用するようになったのである。世界各地のさまざまな民族・文化集団に伝わる、火の起源をめぐる神話には、そうした記憶が刻み込まれているのである。

もつともよく知られているのは、古代ギリシヤの神話のプロメテウスの物語である。天の神ゼウスが隠し持つ火を、知恵に長けたプロメテウスが盗み出して地上のウイキョウという木の幹に隠した。この罰のためにプロメテウスはコイカサスの山頂に縛り付けられ、その肉体を毎日ゼウスが派遣した鷲によって食い荒らされる、という責め苦を受け、ヘラクレスによつてようやく解放されるのはそれから三十年後であつた。また、プロメテウスが火を隠したウイキョウの幹の内部では、火が燃えさかつていて、その木から人々は火を取り出して利用することになつたわけであるが、その方法を教えた神は、火を作る棒の保持者ヘルメスであるといわれている。こうした神話には、雷によつてもたらされた火事を人間の世界に持ち込んで管理・活用するようになったことの記憶、あるいは乾いた木の枝が摩擦することによつて発火する現象を観察することから発火法を学んだという、太古の人々の記憶が刻み込まれているのである。

ミクロネシアのヤップ島にも、同様のメッセー
ジが託されていると思われる神話が伝えられ
ていた。ヤラファット神(地域によってはオロファ
ットとかヨロファスなども呼ばれる)は、ミク
ロネシアの神話・伝説的世界では広く見出せ
る神で、プロメテウスと同様に、天の神であり
ながら、人間の側に立って行動するトリックス
ター¹文化英雄的な神話形象である。たとえ
ば、遠洋航海用の大型カヌーを収納する力又
一庫を倒壊しにくくする工法を人間に教え
たとか、魚を捕る釜を教えたとかいった話は、
そうした性格をよく伝えている。このヤラファ
ット神話群の一つに、火の起源に関わる話があ
る。

昔、ヤップの島民はヤムイモやタロイモをもっ
ていたが料理する火はなかった。そこで、海辺
の砂の上において太陽の陽(天の火)で焼いて
いた。しかし、その仕事がつらかったので、天に
住むヤラファットに助けを求めた。すると、雷
の神がタコの木に落ちてきた。雷神は女に、土
から鍋を作り、棒を擦って火を起こし、その火
で料理する方法を教えた。

日本における火の神話

火の起源を物語る神話は世界各地から報
告されている。しかしながら、日本には、前述
のようなはっきりとした内容をもった火の起

源を物語る神話はない。もっとも、上に述べた
神話に照らし合わせると、かつては火の起源
神話の相貌をもっていたのではないかというこ
とをうかがわせる神話がいくつか見出される。
たとえば、雷神降臨を物語る神話はそうした
性格をもった話で、京都の賀茂別雷神社(上
賀茂神社)の祭神についての神話などはその一
例であろう。

賀茂建角身の神には二人の子がいた。玉依
姫と玉依彦である。姫が小川の堤で遊んでい
たところ、丹塗の矢が流れ寄ってきた。拾って
家に持ち帰り、寝床に置いたところ、姫は妊
娠し、男の子を産んだ。この子が成長するにつ
れ、賀茂建角身はこの子の父が誰か知りたく
なり、多くの者を招

いて宴会を催し、そ
の子に向かつて、自
分の父と思う者に
酒を注げ、と命じた。
すると、子どもは酒
杯をもって、宴の場
の屋根を突き破って
天に昇っていった。そ
こで、その子は賀茂
別雷(若い雷)と名
づけられた。父は天
の雷神(火雷)で丹
塗の矢に変じて、玉
依姫と契ったのであ
った。

この神話は明ら

かに水神信仰的な変形を蒙っている。しかし、
大胆に推測すれば、この話は元来、天の賈(火)
神が地上に雷の子(地上の火)をもたらすと
いう神話であり、また丹塗矢と玉依姫の契り
は火を起こす棒による発火法の神話的表現
であって、そう考えると、今日まで伝わっている、
闇のなかで行われる別雷神の降臨を擬した
ものという「御阿礼神事」の原型も、鑽火と
それによる神饌、つまり火の起源とそれによ
る料理の起源の記憶に関わる神事であったと
も思われるのである。

火の起源をめぐる想像力は、太陽(天の火)
天の雷 落雷 天の火の地上の落下 火
事(制御されない火) 人間の使う火(制御さ



イラスト：大場 康弘

れた火」といったイメージ連関のなかで他の自然や文化諸要素とも関係しながらさまざまに膨らみかたをしているようである。

人間世界にもたらされた火は、神秘的もしくは象徴的な意味・役割を付与された。そうした思想は、世界各地でみられる火祭りにかがうことができる。ヨーロッパでもっとも一般的な火祭りは、春に行われる共同体的な火祭りである。その様子は次のようなものである。子どもたちが町や村を回って薪を集める。薪を出すのを拒むとその家には不幸が襲うとされている。祭りの当日になると、広場や村はずれなど公共の場に薪が積み上げられて火が点けられる。炎が盛んなほどその年の作物は豊作だとされる。火は新婚の男女が点ける。春と豊饒が期待されているからである。また家々の炉の火はいったん消され、この祝火の燃えさして付けかえられる。燃えさがる祝火の周りで人々が歌い踊り、果ては乱痴気騒ぎとなる。祭りのクライマックスは、「魔女」の人形を町中や村中を引き回したあと、この火のなかに投げ入れる場面である。この人形は冬や災厄を象徴している。厳しい冬が終わりを告げ、生命が芽生え再生してくる春の到来を人々は祝っているのである。火はよみがえってきた太陽を象徴するとともに、共同体を脅かす邪悪なるものを焼き殺す清めの火でもある。読者のなかには記憶している方もおられるだろうが、フェリーニ監督の名作『アマルコルド』のクライマックスを飾るシーンは、まさしくそうした火祭りを生々しく描き出していた。

この祭りにおいて行われる家々の炉の火の更新は、これまでの一年という時間の終わりへと、これからの一年の始まりを象徴している。それは一年という時間の死と再生でもある。こうした意味合いをもった鑽火の神事は日本でも見出される。元旦の朝、京都の人々は京都の八坂神社の鑽火を分けてもらい、その火で調理した雑煮を食べるものだとされてきた。いわゆる「おけら詣り」であるが、そこに見出されるのは、火を時間の象徴とみなす思想である。

火は「世界」の象徴

火にはまた、共同体や国家や王つまり「世界」の象徴という意味合いも込められることもあった。アフリカのバンツー系の王国では、王宮には王が在位中はけつして絶やしてはならない聖なる火が灯し守られていて、王が亡くなると王宮の聖火をはじめとして國中の炉の火が消される。そして新王の即位によって新しく鑽られた火で家々の火が点けられる。すなわち、ここでは火は「王」であり、「国家」であり、「世界」(秩序)あるいは「時間」の象徴なのである。「時間」という点でいえば、日本では、国家を越えた「永遠」を象徴する火が尊ばれた。延暦寺の創建以来絶やされたことがないという「不滅の火」などがそれにあたるだろう。

ところで、日本でも火祭りが行われている。

しかしながら、日本の火祭りはヨーロッパの火祭りとはやや性格を異にしている。日本の火祭りは二つに大別される。一つは真冬に行われる火祭りである。これはヨーロッパの火祭りに近い祭りで、「左義長」とか「どんど焼き」等と称され、子どもたちが村中から集めた正月飾りなどを集めて村はずれに積み上げて燃やすというものである。こうして、古い年が去り、新しい年が開始されたことを祝うとともに、「お正月さま」と呼ばれる来訪神をその火の炎で送り、新しい年の平安・豊作を祈る。

これに対して、夏の火祭りは家族的な性格が強い。というのは、夏の火祭りは、家単位で迎える先祖祭りの一環としての火祭りを基礎にして生み出されたという歴史があるからである。先祖を迎えるための焚き火、そしてそれをあお世へ送る焚き火。それはやがて京都の大文字送り火や万灯会を生み出し、さらには秋田の竿灯や青森のねぶたのような派手な飾り灯籠へと変化した場合もある。しかし、そうした場合であっても、その基調には、先祖・精霊たちの鎮魂という思想が脈々と流れている。ここでの火は燃えさがる火、何事も焼き尽くすような強い火ではない。それは闇の混じり合った光景が作り出す幻想的世界へ誘う、柔らかく揺れる炎としての小さな火である。夏の火祭りの特徴はそこに見出されるのである。

寒い冬から暖かい春に向かう季節の火祭りは、燃えさがる火を求め、暑い夏の涼を求める季節の火祭りは、闇に浮かぶ柔らかな火を求める。そして、そのいずれの火であっても、その運

動する炎のなかに、異なる領域を媒介したり秩序の転倒・変化を見出していたりという共通点を見出せるであろう。火の本質とは、なによりもまず不定の運動にあるのだ。もっとも、ゆらめく炎をともなつた生の火に接する機会は、現代ではほとんどなくなってしまうている。しかし、わたしたちはこつした火の本質に関わる伝承を忘れ去ることはできないだろう。

CEL



イラスト：大場 康弘

参考文献

1. 大林太良編『日本古代文化の探究 火』社会思想社（一九七四）
2. J・フレイザー『金枝篇』岩波文庫（一九五二）
3. J・フレイザー『火の起原の神話』角川文庫（一九七二）

小松 和彦（こまつ かずひこ）

国際日本文化研究センター教授。一九七〇年埼玉大学教養学部教養学科卒業、一九七二年東京都立大学大学院社会科学研究所修士課程修了、一九七六年東京都立大学大学院社会科学研究所博士課程単位取得退学。専門は文化人類学、民俗学、口承文芸論。信州大学教養部講師、助教授、大阪大学文学部助教授、教授を経て現職。著書は、『京都魔界案内』（光文社）、『神なき時代の民俗学』（せりか書房）、『神になつた人びと』（淡交社）など。